

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



東かがわ市
上村 一郎 市長



【内田】

本日ファシリテーターを務めます、せとうち観光専門職短期大学、観光振興学科の内田と申します。よろしくお願いいたします。

こちらが安村学長です。日本で初めて観光学の博士号を取得した観光学のエキスパートです。

【安村】

本日は東かがわ市の上村市長に、これから観光と地域振興に力を入れていかれるということで、特に観光振興の基本調査に「観光まちづくり」という言葉を入れておられていますので、今日はそれについて伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【上村】

エキスパートからのかなり重い話をいただきそうな気がします。

よろしくお願いいたします。

【内田】

本日の対談は、東かがわ市長の上村一郎様でございます。最初に一言、ご挨拶をよろしくお願いいたします。

【上村】

みなさん、こんにちは。東かがわ市市長の上村一郎でございます。

本日、安村学長との対談ということでとても緊張しております。東かがわ市は2025年に瀬戸内国際芸術祭、そして大阪・関西万博と大きな節目を迎えていますので、私の方が学長にご教示いただきたいという想いで望んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

【内田】

ありがとうございます。最初は地域と観光という話題で、東かがわ市について市長から教えていただきたいのですが、産業、歴史、文化など、東かがわ市も魅力がいっぱいあると思うのでご紹介いただきます。

【上村】

東かがわ市は22年前に合併をしました。平成の大合併で生まれた町です。それまでの引田町、白鳥町、大内町の3つの町が合併してできた町でございます。

特に、産業で申しますと「手袋」です。この手袋の歴史は、130年ぐらいになります。この手袋というのが、当たり前のことを話しますが、人間の手はものすごく複雑なんですよ。この4本の指にそれぞれ関節があって、独立して動いて「親指の独立性なんやねん」みたいなところもあって。横から見るとだんだん薄くなり、握ることもできるし、反ることもできる。これを立体的に裁断ができて、立体的に縫製ができると、何でも縫えるんですよ。手袋職人さんに言わせると、「気体と液体以外は何でも縫える」という風におっしゃっていました。手袋もそうなんです、例えば名刺入れや財布、バッグといった革小物、レザー小物も縫製をしますので、縫製業、手袋産業が広がっています。

他にも、手袋産業の歴史は130年と申し上げましたが、270年の歴史がある醤油産業や220年の歴史があるさぬき和三盆もありますし、約100年の歴史があるハマチの養殖もありますので、本当に東かがわ市の産業は歴史と共に育ってきたというのが大きくあります。そんな町が東かがわ市です。

【内田】

ありがとうございます。

私も和三盆を買って人に送る時があるので、東かがわ市産のものを送っています。

【上村】

今日、和三盆を用意するのを忘れちゃいました。お茶請けとしては本当に最適ですし、そもそも和三盆自体は型抜きでいろんな形が取れます。またそこから和三盆を作る時の糖蜜も使って、糖蜜からクラフトコーラやお酒のラム酒を作る動きがあり、元々和三盆は歴史あるものなんですけども、そこから派生して、また新しいチャレンジが産業としても始まっているのが東かがわ市です。

【内田】

私は海外の人に東かがわ市の和三盆を送ったのですが、ティーセレモニー、お茶の時間に「すごいジャパニーズだ」と喜ばれました。

【安村】

上品な味ですよ。ただ甘いだけじゃないですよ。

【内田】

形も上品だし、味も上品。

【上村】

上品な味ですから、まさに砂糖菓子の和三盆糖もそうですし、先ほどのお酒もそうですし、香川県といえうどん県、さぬきうどんでございます。そのさぬきうどんの出汁、ここに和三盆糖を使っているうどん屋さん東かがわ市にありまして、先ほどの手袋から派生してというのもそうですし、和三盆から派生して、というのが歴史とチャレンジが重なっていることが東かがわ市の大きな強みなんだろうなと思っています。

【内田】

産業でいくつも出ましたが、産業と絡めて歴史、文化のお話もご紹介いただけるとありがたいです。

【上村】

歴史でいうと先ほど申しましたように、産業の歴史というのが非常に大きいです。ずっと遡りますと、八代将軍徳川吉宗、彼がさぬきの国も、日本全体で産業を興していくぞ、というところの歴史



から振り返って、吉宗の時代より前にも醤油は進んでいましたし、製塩業ですよ。そこから和三盆、砂糖というのが出てきました。その後、手袋やハマチの養殖も出てくるのですが、歴史、文化でいうとやはり瀬戸内海の実在感が本当に大きいです。特に、この東かがわ市は香川県の一番東の端に位置しますので、昔は九州や、松山、丸亀、高松もそうなんです、そこから来た船が大阪に向かう、または、大阪から来た船が東かがわ市から西に向かう拠点となっておりましたので、いろいろなものが集まってきました。そこから東かがわ市に産業が広がっていったということを申しますと、やはり瀬戸内海と共に産業が育ってきたというのが、東かがわ市の分かりやすい歴史としてあるかと思います。

【内田】

香川県の中でも徳島、淡路、関西に一番近いところの、中心地のような場所ですよ。

【上村】

おっしゃる通りです。ここから特に高速バスで関西方面に行くことが多いのですが、神戸であれば1時間半、大阪の中心部であれば2時間半あれば十分に行ける距離にありますので、我々としても観光のターゲットは、もちろん香川県内の方々にもたくさんお越しいただきたいのですが、もっと大きな観光の市場を見ていくと関西圏、近畿圏は大きく視野に入ってくるところだと思っています。

【内田】

どうしても関西圏だと日帰りというのが（旅行の定番）、それは香川県全体もそうなんですけど、やはり宿泊していただいて、お金を使っていただくことを頑張る必要があると思うのですが。

【上村】

内田先生のご指摘の通りでして、香川県は高松エリア、中讃・西讃エリアに魅力的な観光コンテンツがあります。東かがわ市の課題としては、高速道路で関西圏から来てくれても、東かがわ市を素通りして高松、中・西讃というのがあります。いかに東かがわ市に降りてもらえるか、いかに泊まってもらえるかという夜のコンテンツです。お酒もそうですし、食事、泊まる宿泊先そのものもそうですし、もっと言うと早朝だったり、そういったコンテンツをいかに充実させていけるかというのは、これからの大きな課題だろうなと思っています。

【内田】

2025年2月に本学と包括連携協定を結ばせていただき、ありがとうございます。宿泊に関しては、いろんな可能性があるかと学内で話し合っています。

【安村】

本当に素晴らしい。先ほど伺いました産業もそうですが、その他にも話されていた瀬戸内海。東かがわ市にはいろんな観光資源がありますね。文化も歴史もありますし。

【上村】

先ほど申した中で、瀬戸内海に関係するところでもう一つは白鳥神社があります。白鳥神社が大きく盛り上がっていた時期は少し昔になるんですが、四国八十八カ所との親和性があります。四国八十八カ所の一番札所の霊山寺からスタートして、霊場を回り八十八番札所の大窪寺、そこまで行ってお礼参りのため高野山に帰る時に多くの方が白鳥から大阪に帰っておりました。「四国八十八カ所に参れました。これから海の旅が安全でありますように。」とお参りしていたのが白鳥神社です。八十八カ所のお寺を回った後に、旅の無事を神社で祈るというの

が日本人らしくていいなというのはあるのですが、八十八カ所の巡礼の中で白鳥神社が大きく注目された歴史もあります。

【内田】

他にもいくつか地元を代表する特産品がありますので、ご紹介いただけますでしょうか。

【上村】

では先ほども少しお話しした、ブリ、ハマチでございます。ブリ、ハマチの養殖が始まったのが東かがわ市で、日本でハマチの養殖、発祥の地です。約 100 年前に、養殖に成功しています。

特に、ハマチはオリーブハマチをはじめ、香川県の名産にもなっております。モジャコ、ツバス、ハマチ、ブリと出世魚なので、非常に縁起のいいお魚でもあります。80cm 以上になるとブリになるのですが、東かがわ市の「引っ張る田んぼ」と書いて引田町というところがあります。その引田ブリが名産になっていまして、大体毎年 11 月から 1 月ぐらいの冬場の引田ブリがめちゃくちゃ美味しいです。ブリ独特の脂の多さ、こってりさもそうですし、本当に新鮮なものだと歯ごたえがすごいんですよ。「こんな歯ごたえがあって、脂がのった魚があるんだ」というのは、恥ずかしながら大人になってから初めて美味しさが分かるようになってきて、これは本当に皆さんにおすすめです。

もう 1 つが牡蠣ですね。もちろん瀬戸内海ですので、香川県にも牡蠣養殖をしているところはたくさんあるのですが、東かがわ市は生牡蠣に着目しています。「なんで牡蠣やねん」ということですが、やはりハマチ、ブリは非常に大きくなってくる、ブリなら 80cm を超えてきますので、そうすると養殖場としては沖に行かないとできないんですね。沖に行くということは漁師さんとしても危険が伴う、となると新しく漁師になった方はなかなかうまく仕事ができなかったり、ご高齢になった漁師さんだと、ちょっと沖に行くのがしんどくなるというところがあって。とはいえ、漁業を東かがわ市でどのようにキープしていくかを考えた時に、比較的浅い所で、ある程度単価がとれるものを考えた時に生牡蠣だということに着目しました。ハマチの養殖が日本で初めてスタートした引田町に安戸池という汽水池があります。この中で今、生牡蠣の養殖を始めているところですよ。

【内田】

ADOMILK ですね。

【上村】

知っていただいて、ありがとうございます。

【安村】

今メディアで盛んに取り上げられているんじゃないですか。

【上村】

そうですね。メディアの皆さんにもご注目いただいておりますのが、スマート牡蠣養殖ということで、デジタルの力を使って牡蠣を育てていこうと。

安戸池が非常に穏やかな瀬戸内海の中でも海水が入ってくる池なので、すごく安定しているんですよ。その中で水温だったり、水質だったり。よくある引っ張る感じの牡蠣の育て方ではなく、箱に入れています。箱に入れているのを、時々ひっくり返して牡蠣の殻同士をぶつけさせたり、乾かししたりして牡蠣の発育を図っているんですね。それを一日何回、回しているか。そうなってくると、どれぐらいの水温でどれぐらいの水質の中で何回ぐらい回せば、どれぐらいの牡蠣が育つのかというデータが取れるんですね。データを取れるので歩留まりが良くなってくる。どれぐらいの環境で育てていけばいいのか、春だったら、夏だったら、秋だったら、冬だったらというデータを、今年3年目でデータを取ってきていますので、安定した牡蠣養殖ができる。こういうところが、メディアの皆さんにもご着目いただいているところかなと思っています。

【安村】

さすが、市長、お詳しいですね。

【上村】

牡蠣はまあまあ勉強しました。まあまあ牡蠣を食べましたよ。

【内田】

漁業や水産業だったり、産業と観光の関連ということで、ここからは専門家がお話しさせていただければと思います。



【安村】

観光と産業を結びつけて産業観光というのがあります。

これは私が20数年ほど前に、三重県の鈴鹿市の大学におりまして、その時に名古屋のJR東海の初代会長の須田寛会長が産業

観光を名古屋で広めようとしてしました。

実は、産業観光というのはイギリスで「近代工場遺産の観光」ということで始まったらしいのです。

ただ、その当時の須田会長は名古屋の伝統的な産業から、トヨタのような最先端技術の産業まで、全て観光と結びつくということをおっしゃっていて、最後はもう国際会議まで開催されました。産業と観光が結びつくということをようやく

その時に注目したんじゃないかと思うんですね。

先ほどのお話を伺っていると、東かがわ市ではまだ観光と産業が結びついていないのでしょうか？

【上村】

兆しは出てきています。特に、手袋縫製業者さんを中心に、民間で始まっているのですが CRASSO というまさにファクトリーツーリズム、産業観光が3年ほど前から始まっています。

手袋縫製業者さんの大きな課題として、どうしても OEM 生産が売上の割合として大きいので、その中で「手袋、縫製、東かがわ市」ということを見せたくても、なかなか見せれることができない、言えないというのがありました。

多分皆さんご存知の有名な野球選手ですが、名前を言えません。名前を出しているところかというと、ゴルフの松山英樹選手のゴルフグローブや香川県出身のフェンシングの宇山賢選手のフェンシンググローブも東かがわ市で作られています。他にもサッカーのゴールキーパーのグローブなど、本当にスポーツに関するものはたくさん作ってはいるものの、なかなか言えるところ、言えないところというのが出てきます。各社のオリジナルブランドもそれぞれの会社さんが作られているのですが、それを売り込むのもなかなか大変だということで、それなら職人さんが作っているところを見に来てもらおうと。実際にお客さんと職人さんの対話を通して、この会社、商品、技術をお客さんに好きになってもらい、購買に結びつけていこう、ツーリズムに結びつけていこうという取り組みが始まっています。

香川県内で最初は東かがわ市とさぬき市の東讃地区でスタートしていましたが、今はもう高松や中讃、西讃、小豆島もそうですし、県外からも一緒にやりたいという声が結構集まっているようです。ですので、先ほどおっしゃられた産業観光が、このファクトリーツーリズムから大きく一歩踏み出せるんじゃないかなという期待はあります。

【安村】

体験も含めてですね。おそらくハマチや牡蠣も見たいという観光客がいるんじゃないですかね。見せ方もあると思うのですが。

【上村】

よく言われることですが、観光は光を観るのもそうですけど、やはり観るだけだと今はなかなかというところがあるので、体験するとか職人さんや漁師さんと交流することで満足度を高めていく、そこをキャッシュポイントとしていくというのがこれからの観光のポイントなんだろうなと感じています。

【安村】

職人の技は日本人もそうですけど、特にインバウンド観光で外国人観光客が見

たがりますよね。

【上村】

私がすごいと思ったのが、今、万博が開催されていますが、4月の末から5月の頭に香川県全体で出展しようと香川県催事がありました。その中で東かがわ市が出展したものが「うどん手袋」だったんですよ。最初聞いた時に「なんだそれ？」となったんですが、指を縫う、縫製する技術をどんどん細くして、ちょっと角張らせるとどんどん麺になるんですよ。またレザーもちょっと叩いたり、油を染み込ませたりして、凹凸をつけたり、色の濃淡をつけることでワカメになったりいろんな具になっていくんですよ。ボア素材のモコモコした素材で天ぷらを作ったりして、これがめちゃくちゃウケたんですよ。

「これは何なんだ？」

「これはレザーでできています」

「うどんの麺は何でできているんですか？」

「麺 100%です」

とかなんとか言ったりして。そこに外国人の方も来られまして、そういう方とも話していると、「そもそもラーメンとうどんは何が違うんだ」みたいなところから始まるのですが、「ここの技術はすごいな、よくこんなの作れるな」と。いろんなプラスチックや蠟で作っているような、レストランのカウンターの見本であるようなものとは完全に一線を画していました。

これは東かがわ市の手袋縫製技術は世界に通用するなと思いました。

【安村】

なるほど。そうですね。それは見せ方次第で本当にみんな喜ぶでしょうね。外国人の観光客は特に何時間でも見えていますよね。職人の技、匠の技を。飽きないんじゃないですかね？手袋でも応用が利くというところ見せてあげると。

【上村】

いけると思います。気体と液体以外は何でも縫えますからね。

【内田】

ありがとうございます。農業関係でパセリを始めとして、東かがわ市の特産の強みのある農業があるかと思うのですが、その辺りもご紹介いただいてよろしいでしょうか。

【上村】

農業で申しますと、先ほどおっしゃられたパセリが合併前の大内町時代から「大内パセリ」ということで、パセリ農家さんが結構増えていて、パセリを専門で作っているエリアが全国ではほとんどないんですよ。ですので、この大内パセリが一気に広がりました。最近は農家さんの数が人口減少とともに減っています。農家さんは減っている中で、作付面積が広がっているのがアスパラです。今、「さ

ぬきのめざめ」といって、非常に大きな市場になっていて、とても美味しいです。歯ごたえ、味わい、めっちゃめっちゃ美味しいんです。そのアスパラを作られている方々が非常に増えていますし、東かがわ市内の特定のエリアではホワイトアスパラ。日光を照らしてはいけないので、ビニールハウスを完全に幕を引いて、日光が入らないようにして育てています。細かい育て方は本当に企業秘密です。ブランドを大事にしているホワイトアスパラもありますので、今アスパラが東かがわ市の農産物としては結構伸びています。

あともう1つ、水主米（みずしまい）というお米がありまして、令和の米騒動で色んな議論が巻き起こっていますが、水の主と書いて水主（みずし）というエリアがあります。水の主というぐらいなので非常に水が上質なエリアです。山からの湧水がどんどん流れてきて、その水で育てたお米が水主米で毎年JAさんのランキングでもかなり上位に入ってくるお米があります。そのお米を使って、これから瀬戸内国際芸術祭もありますので、おにぎりを作って外に出していこうという取り組みが始まっています。また、それを見て水主米を作ってみようかなという農家さんが増えてくれたら嬉しいなと思っています。

【内田】

ちょうど瀬戸内国際芸術祭の話が出ましたが、東かがわ市が瀬戸内国際芸術祭の会場ということなので、その辺りを教えていただけますか。

【上村】

瀬戸内国際芸術祭、この東かがわ市も今年から初めて参加ということで、元々は有人島、人が住んでいる島が対象で、東かがわ市は無人島しかなかったんですよ。

私の前の市長の時代から

も「瀬戸内国際芸術祭に出れたらいいな、でも有人島がないな」ということで、私が市長になってから「じゃあ上村が無人島に住めばいいんじゃないか」と、そういう議論も出たぐらい市民の皆さんからも、先ほど申しましたように瀬戸内海の歴史と共に文化、産業が発展してきた町でもありますので、なんとか瀬戸内国際芸術祭にも入っていけないかということで2025年、令和7年の今年から東かがわ市も初参加ということになりました。

もちろん、東かがわ市とはいえ、広さも150km²ぐらいありますので、その中で海に関係しているところで、かつ、ある程度歴史もある、来られた方々にご満足



いただけそうなエリアはどこだろうと色々と議論を重ねていくうちに引田町だと。

先ほどからずっと議論に出ています、産業というところに瀬戸内国際芸術祭実行委員会の皆さんにも着目していただいて「東かがわ市で海を表現するのはやっぱり産業だよな」から繋がりました。引田町のエリアでアート作品を作っている最中ではあるのですが、手袋、醤油蔵、酒蔵、船、大漁旗、これらをひっくるめた引田町の皆さんの産業を通した暮らしなどをモチーフ、コンセプトとした作品が出来上がるようになって「これは楽しみだなあ」というのをすごく感じます。

この大漁旗もすごいなと思ったのが、ペットボトルのキャップ、これから作るんです。「なんだそれ？」となりましたが、これも SDGs の観点も含めて、市民の皆さんからペットボトルのキャップをずっと集めてまして、それを溶かしてプラスチックみたいにして、プレートにしていたものを、大漁旗のようなデザインにしていくというアート作品が完成する予定です。それも結果、引田町の漁業を代表するようなものでございますから、これもできるのが楽しみです。

【安村】

私は観光の観点から見ると、いろんな観光素材があって素晴らしいですね。

話は戻りますが、農業と観光というのはまだあまり結びついていないですか？

【上村】

まだ結びついていないですね。ただ、先ほどのものづくりの方々を中心に、スタートしていますファクトリーツーリズムの CRASSO、この中にはものづくりという広い視点で「飲食も含めていこう」としています。

東かがわ市で着目されている料理人さんも多いので、そういう方々も巻き込んでいこうという動きになっています。そこがもっと進んでいくと生産者さんはものづくり、言わばファクトリーでもありますので、そういう方々も巻き込んでいけたら結構いいものになっていくのかなと思います。

課題としては、東かがわ市はどうしても平野が少ないです。高松より中讃、西讃は非常に平野が広いので、元々の文化として、農業が非常に強い地域でもありました。東かがわ市の一次産業、二次産業、三次産業の中で一次産業に従事されている方が 1 割にも満たないので、その母数の中で観光としてどう回していくかというのは、これからの課題の一つかなと思います。

【安村】

これまでの話を聞いていると文化や歴史も大変蓄積されているので、おそらく食文化もきっと東かがわ市に独特なものがあるんじゃないかなと思います。なければ作ればいいわけで、そういうものと農業で特産品と先ほどの飲食の点

と結びついたら、いろんな産業が出てきそうで楽しみですよね。

【上村】

そうですね。食文化で申しますと、先ほどからの和三盆が非常に大きなポイントかなと思います。

もちろん砂糖菓子としての和三盆はありますけども、調味料としての和三盆も非常に用途があります。今チャレンジしようと思っているのが和三盆かき氷。今までも商品としてはあったんですよ。ただ瀬戸内国際芸術祭は8月で、ものすごく暑い時期ですので「冷たい食べ物ってなんだろう？」と考えた時にアイス、かき氷、「和三盆かき氷があるやん！」というところに気づき、和三盆かき氷は是非ご賞味いただきたいんですが、めちゃくちゃ美味しいです。

【内田】

単価が高くなりませんか？

【上村】

いや、単価を上げないといけないと思っています。むしろそれを安売りしますと、和三盆を作っている会社さんもそうですし、東かがわ市内にはサトウキビ農家さんがいらっしゃいますので、その方々が持続的に和三盆を作っていける、サトウキビを作っていける状態を考えると、やはりある程度単価が取れる商品を作っていかなければと。幸い、氷自体の原価はそこまで高くないので、よく言われる付加価値だったり、そこに見合う体験、経験、それを作っている方々とのやり取り、また瀬戸内国際芸術祭の引田町というエリアの空間、それらと一緒にかき氷を提供できることを考えていきたいなと思っています。

【安村】

観光振興の経験則のようなもので「良い観光客が良い観光地を作る」という、今まで伺ったお話を聞くと観光の素材が素晴らしいので、きっと今流行りの高付加価値、どのような観光客をターゲットにするかにもよりますが、見せ方、作り方によっては本当に素晴らしい観光振興、それはまた観光まちづくりとして地域振興につながると素晴らしいですね。

【上村】

おっしゃる通りです。やはり観光とひとくちに申しまして単純に人が来て、「東かがわ市面白いね、すごいね、綺麗だね」

「じゃあ高松市でご飯食べて帰ろうか」

「じゃあ徳島県で泊まって帰ろうか」となると、意味がないとは言わないですけど、極めてもったいない。いかに観光を通して、東かがわ市でキャッシュポイントを作って地域経済として成り立たせていくか。特に、東かがわ市が人口減少のスピードが香川県内でもトップクラスで、高齢化率もう44%を超えているようなエリアなので、なかなか内需としての経済を考えると、どうしても限界があ

る。いかに市外、県外、もつというところ国外の方々に東かがわ市の商品・サービスをご購入いただけるか。それをどういうポイントを作っていくかというのは行政ではある程度、瀬戸内国際芸術祭なり、大阪・関西万博なり、そういう場はある程度準備できていても、そこで実際に経済としてビジネスをしていくとなると、やはり民間事業者さんの協力ができないです。むしろ、そこが行政として一番苦手としているポイントなので、観光事業者さん、市民の皆さんと共に観光産業を育てていかないといけないなっているのは感じています。

【安村】

私は色々と上村市長が情報発信されているのを拝見しています。

やはり「観光まちづくり」というと、住民の関わりが大きいかと思うのですが、地域住民の観光に対する思い入れはどうなのでしょう？多分、上村市長から住民に対して随分投げかけられているんじゃないかと思いますが。

【上村】

ここは本当に皆さんのご知見をお借りしたいと思っています。と申しますのも、私を含めて市役所の職員もそうですし、市民の皆さんもやはり観光にあまり慣れていないんですよ。来られた方を、どのようにおもてなしすればいいのか。おもてなしも、イメージがとても広いので、人によっては無料で何でもやってあげることがおもてなしだと感じている方も少なからずいらっしゃいます。

でも、そこに価値を見出して、そこでお金をいただくというところまで回していないと、なかなか観光までいかないのですが、「いや、お金をもらおうとおもてなしにならないだろう」という方々もいらっしゃいますし、そもそも市外、県外から来られた方を、どのようにおもてなししていくのかわからない。

報道とかインターネットでは、オーバーツーリズムのニュースが昨今非常に議論になっておりますので、「上村が観光客を呼ぶって言ってるけど、オーバーツーリズムになったらどうするんだよ」と、捕らぬ狸の皮算用ではないのですが、そういうところにどうしてもご懸念を持たれる方もいらっしゃいますし、ボランティアで携わっていただいている方々も本当にお気持ちや志はありがたいと思いつつ、その方々の次に繋いでいくためには収入がないと、短期間で終わってしまうところもあるので、人が来られた時のおもてなしの仕方、マナーや話し方といった細かいところもそうですし、そこでいかにキャッシュポイントを作って自分たちの仕事、店舗、会社の経済にしていくというチャンネルをどう変えていくか、増やしていくかというところは、皆さんの力を貸してもらいたいと思っています。



【安村】

難しい課題ですが、最近のおもてなしやホスピタリティは、地元住民が「おもてなしの意識を持て、ホスピタリティを学べ」など、ホスピタリティマネジメントと言われていますが、私は観光事業者

の方が観光客をもてなす、これは当たり前のことだと思います。ですが、はたして住民がホスピタリティマネジメントをする必要があるのかと考えます。むしろ住民同士で仲良く、人間関係、社会関係を保っていて、会うと自然に「こんにちは」「おはようございます」その延長線上で観光客に向かい合えば、それが普通ではないかと思うんですね。

「観光まちづくり」の成功事例の代表的なものは、閉鎖的なイメージの中山間部が多いのですが、外から観光客が来ると「今日は天気がいいですね」と地元の人が挨拶して、それが観光客にとっても好印象を与えるということがあります。観光事業者はホスピタリティマネジメントが必要ですが、地元住民にホスピタリティマネジメントを求めるよりも、むしろ自分たちの町の中で挨拶をしたり、親しく付き合うことが必要だと思うのですが、いかがですか？

【上村】

おっしゃる通りかと思います。私自身も国内、国外も含めて、旅行に行った時の一つの楽しみで「ここに来たら、あそこに行くぞ」と代表的な観光地がありますが、結構好きなのはスーパーに行くことです。香川県だとマルナカやマルヨシなどがありますが、地元のスーパーに行くと地のもの、観光客ではない地域の皆さん、地元の皆さんが買うお惣菜とかがあったりします。「なんだこれ？これって食べれるの？」みたいな海産物、農産物、お菓子、そういうのを見るのが結構楽しいんです。多分皆さんもそれに近い感覚を持たれているんじゃないかと思います。私の場合は、スーパーを通して、地元のものを感じますが、結果、そこで住まわれている方々がちょっと仲良くしてくれる。

「おっちゃん、どこから来たんや」

「香川県から来たんですよ」

みたいな。たまたま旅行先の居酒屋で隣の人から話しかけられることがあるじゃないですか。多分、そういうのは地元、地域エリアが安定しているといいますか、学長がおっしゃられている仲がいい、挨拶ができる、来た人に対して「なんか変なやつが来てる」ではなく、オープンな姿勢だといいますね。

【安村】

そうですね。やはり文化や歴史の積み重ねがあるんじゃないですかね。住民に共通の価値観や意味の世界のようなものがあるということですね。

【上村】

そういう意味では、比較的東かがわ市もオープンな姿勢はあるのではないかと考えています。

それこそ、引田町は昔から船の交通の要所として「風待ちの港」と呼ばれることもあります。それは引田町を拠点に、西に行く人、東に行く人が風を待って瀬戸内海を渡っていく、風を待っている港だから「風待ちの港」が引田町です。特に、高度経済成長時代、バブル時代に手袋が一世風靡していた頃、三本松町に商店街がありますが、商店街にはたくさんスナックがありました。市外、県外から遊びに来ている方々がスナックに結構行っていました。人口一人あたりのスナックの店舗数が日本一だったというエリアが三本松町だったということもあります。歴史的に文化的に人を迎え入れるという姿勢は、皆さん持っているんじゃないかなと思います。ただなかなか来てくれないんですね。

【内田】

ちょっと仕掛けをすれば人が繰り返し来てくれそうですね。

【安村】

四国は接待の文化もありますしね。やはりおもてなしやホスピタリティの基本は個別化だということを知人が言っています。

「あ、自分のためにサービスをしてくれているんだ」

「自分をもてなしてくれているんだ」

と、そういう気分させるのがおもてなしの最重要基本だと言っています。確かにそうだと思います。サービスやおもてなしを提供する人も「あなたのためにやっているんです」という気持ちが大切だと思います。バーなんかに行くと上手いんですね。バーテンダーがお客さんの気持ちを引き出しながら接待することが。そういう接待が住民も普通にできるのではないかなと思うのですが。

【上村】

そうですね。いかにホスピタリティ、おもてなしの心をその人、その人に合わせていくか。当たり前ですが、私たちも特別扱いされたら嬉しいじゃないですか。

「東かがわ市の手袋を見ましたよ」

「あ、知ってくれているんですね」

とやはり嬉しいですし「この間、牡蠣を食べたんですよ」と聞くだけでも特別感があります。例えば「香川県から来たんですよ」と言った時に、市外、県外で「この間、さぬきうどんをテレビで見たよ」と現地の人に言われるだけでも結構嬉しかったりするじゃないですか。来られた方に特別感を見せる、表現するというの

は結構いいポイントなんでしょうね。悪い気はしないですもんね。

【安村】

おっしゃる通りです。上村市長にはおもてなしの個別化を感じますよね。

【上村】

個別化の種類はたくさん揃えています。



【内田】

ありがとうございます。

本学は大学ですので、若者を育てるという大きな使命がございます。

上村市長のキャリアは普通とは少し違っていて、その辺りについて、特に自衛隊を経験されているということを教えていただきたいと思います。

【上村】

先ほど自衛隊というお話をいただきまして、私は東かがわ市、合併前ですと大内町の出身ですが、中学を卒業して自衛隊に入りました。その後、自衛隊を退職して大学に入学して、広告代理店（PR 会社）で勤めた後に、香川県で国会議員秘書を経て、現在市長の職に就いています。

市長の仕事が人生で四つ目の仕事でして、転職としては回数が多い方なのかなと感じつつ、その四つの仕事に共通しているのが「守りたい」という想いでした。最初に中学を卒業してすぐに自衛隊に入ったのも、中学2年生の時に阪神淡路大震災がありました。発災から30年ですが、30年前に震災が起こって、今のよう携帯電話やインターネットもなかった時代で、私の親戚は神戸市に住んでいました。食べ物を送ってくれたり、法事で来てくれたり、遊んでくれる親戚のおっちゃん、おばちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃんがどうなっているのかわからないというのが当時の状況で、父親と二人で現地に、親戚の無事を確認に行っただけですね。幸い、親戚の中に死傷者はいなかったのですが、家が潰れた方もいましたし、職場が跡形もなくなっていて、当時の映像でもあるように、あちらこち

らで火の手が上がっていて、高速道路が倒れていて。

中学2年生の私が現地に行って感じたことは、無力感しかなかったんですよ。

「僕はここで何もできない」あれだけお世話になった親戚の力にもなれないし、助けられないという無力感しかなかったところに、自衛隊の皆さんが災害派遣で来られていて、「こういう人になりたい」と思ったんですよ。

自分が本当にお手上げで、お世話になった方々が周りにいても、彼らの力になれない、僕にはどうしようもないというところで、命、財産、生活を助けてくれている存在をまざまざと目の前にして「人を守る仕事に就きたい」と思い、いい意味でショックが大き過ぎて、そこで自衛隊に入ると決意しました。色々調べていくうちに、中学を卒業してすぐに自衛隊に入れるコースもあるというのを知って、自衛隊に入ったという経緯です。この話で私は1時間話せます。

【内田】

でもその時、周りは引き止める人もいただろうし、驚く人が多かったのでは？

【上村】

もうみんな、大反対でした。親からもせめて高校は卒業してほしいと。でも、私としても強気に言えたのが、中学を卒業して自衛隊に入る人たちはみんな通信制の高校に同時に入学する制度が整っていましたので、「自衛隊に入っても高校を卒業できるから」というので強気に親とも交渉していました。

でも一方で、中学の時の野球部の同級生のお母さんから止められたりして。

「そんなに悪いことしてんのかな」という感じにもなりましたが、やはり自分の中でやりたいとすごく思っていました。実は亡くなってから聞いたのですが、私の祖父が両親を裏で説得してくれていたという話もあったりして、最終的には自分の想いを押し通して、別に恥ずかしいこと、やましいことをやっているわけではないですし、胸張ってできる仕事でもありましたし、実はいろんな方々が応援してくれていたという背景もあって、なんとか入隊できたという話です。

【安村】

いいお話ですよ。情熱的ですよ。

その後も色々情熱的に進められて、今日に至るということですね。

【上村】

それだけが取り柄なんです。

【内田】

自衛隊を終えられて大学進学ということで、中央大学の政治学科に進まれたのはその頃から次を守るのは「人々を守る」ということで、政治の世界をお考えになったということですか。

【上村】

行政の世界には結構関心もありました。というのも自衛隊もそれだけの想いを持っていたので、逆にそれだけの想いがあったので、むしろ自衛隊のいろんなところが気になりましたんですよ。



例えば、好きな人がいた時に好きな人だからこそ気になるところがあるじゃないですか。あの態度はどうなんだろうとか。別に、恋愛感情がない人がやっている分には全然いいんだけど、好きな人だから気になるのはあると思うんです。まさに自衛隊がそれで、一番大きかったのが、1999年に周辺事態法という法律ができて、ざっくり言うと「日本の周辺で武力紛争事態が起こったら、米軍が行くから日本も手伝ってね」と、そういう法律だったのですが、それが当時、かなりの議論を呼んだんですね。

19歳ぐらいになってくると、同級生も大学生になってきて、たまに帰省した時に「自衛隊員から見て、あれってどうなの？」とすごく聞かれるんですよ。

でも、私もそこまで政治、歴史をきちんと勉強していなくて、もちろん自衛隊という仕事に誇りは持っていましたけど、憲法の問題やそれに基づく法律の問題、それに関する政治の課題、それらに直結してくる歴史の話というところが「俺は世の中を何も知らない」と思ったんですよ。

これはちょっと勉強しないとイケないなと思ひまして、特に政治の世界、安全保障の世界、国際情勢というところに非常に関心が向いていって、自衛隊をリセットして勉強し直そうと、それで大学に進もうと思いました。

次の仕事にも繋がってくるんですけど、中央大学という東京にある大学に通っていて、大学は大学で楽しかったですし、勉強もしたり、自衛隊時代からやっていたラグビーもずっと続けていたのですが、結構ショッキングだったのが、四国四県を言えない人が東京には結構いるんだなっていうのが分かりました。自衛隊時代に東北の山形にいたのですが、じゃあ四国の方が東北六県を言えるのかって考えると、言えない方も少なくないと思うんですよ。それと同じで、東京で四国四県が言えない人が結構いたり、自分が好きな自衛隊のことをよく知らない方々も結構多い。もちろん国民にとって、自衛隊が身近な存在であることがいいことなのか、悪いことなのかという議論はあると思うのですが、自分が好きなものを知ってもらえていない辛さっていうのを大学時代に結構感じたんですよ。

当時は、SNS やブログが結構出てきて、mixi や GREE、ライブドアブログ、アメーバブログ等が全盛になってきた時期でした。個人が情報発信者になって、「もっとこれを知ってほしい！理解してほしい！分かってほしい！好きになってほしい！」というのを、一辺倒にはいきにくくなった時代で、自分が好きなものをもっといろんな人に知ってもらいたいの、なかなかできないという思いやそういう課題意識を持っている方々を守りたいと思うようになっていったんですよ。そこで、広告代理店（PR 会社）に行こうというモチベーションになりました。

会社員時代は（顧客として）地方自治体もありましたし、一般企業さんや国を上げた結構大きなイベントの広告宣伝広報にも携わらせていただきました。

【安村】

会社の勤務は東京ですか？

【上村】

東京でした。大学時代も含めて 13 年ほど住んでいました。

【安村】

そのご経験も良かったんじゃないですか。

東京と郷里との比較の視点は重要ですよ。

【上村】

当時から、「ずっと東京で住むのはしんどいな」とは思っただけで、たくさんの方がいますし、毎日どこかで何かをやっていますし、日本の首都なのでいろんなものが集まり、本当に刺激的でした。自分から一歩進めば、自分が見聞き、経験できる量が段違いだったので、それまで香川県の中でも片田舎だったり、自衛隊という極めてクローズドの環境にいたので、そこから大学、社会人という東京の 13 年間は本当にいい経験をさせていただきました。



【安村】

観光まちづくりのリーダー、キーパーソンの特長の一つが地元を離れ、東京や大阪で何年か過ごして、自分の郷里と比較をする「視座」というのですが、違いを知るによって地元の良さを感じら

れて、同時に「東京も便利でいいけど、暮らすのは大変だよね」ということで、自分の生まれ故郷を東京とは違うやり方で良くしようという感じはしますね。

【上村】

おっしゃる通りですね。観光となると、例えば東京タワーやスカイツリーや雷門、ベイブリッジ等、そういうものにはやはり勝てないので、いかに東かがわ市でしか味わえないもの、見られないものでどう戦っていくのかというのは、非常に感じるところはあります。

ただ、東京で暮らして戻ってきて感じたことは、例えば東かがわ市は瀬戸内海によって歴史、文化が育ってきたと言いつつ、日本全体島国なので、海はどこにもあるんですよ。また日本全体の7割が山なので自然もたくさんあると。

東京から海を見に行きたい、山を見に行きたいと言っても、東京も西の方に行けば奥多摩地域で山も経験できますし、海も湘南や九十九里浜まで行けば、綺麗な海もたくさんあるので。東京の人からすると「田舎はどこも一緒」とは言わないまでも、日本全国どこに行ってもある程度人は優しいですし、悪い人が固まっている地域なんかないですし、どこに行っても食べ物も美味しいし、どこに行っても綺麗だし、どこに行っても海に山に事足りるので、この中で香川県そして東かがわ市が差別化していくのはめちゃくちゃ大変だなというのは感じます。

結果、全国的にここではないものはたくさんあるので、競合という言い方をしますが、そこにどうやって勝負していけるのか。それは広告宣伝、PR、営業というところもあるかもしれないですが、そこでの差別化はなかなか難しいと思います。いろんな場所に「東かがわ市です、手袋です、和三盆です、ブリです、牡蠣です」という量、営業的なことだと思いますが、それをやっていかないと「こんないいものがありますよ、どうぞ」だけでは、どんなにいいものでも人はやはり来てくれないんですね。そこは課題意識として感じています。

【内田】

これまでの全てのキャリアが今、生きていますね。

【安村】

ぜひ本学も上村市長の今のお話をお手伝いさせていただきたいですね。

先ほど上村市長もおっしゃいましたが、観光というのは光を観る、魅せるなんですね。本学もまだまだ学ぶことがたくさんあるので、東かがわ市で学びながら一緒に課題解決に取り組みたいです。

【上村】

先ほどは偉そうなことを言いましたが、答えははっきりと見えていないので、今年の大阪・関西万博や瀬戸内国際芸術祭をフィードバックしながら、せと短の皆さんにも見ていただきたいと思います。見ていただく中で、ここはもっと伸ばせるんじゃないかとか、ここは課題なんだろうというところも出てくると思います。我々はどちらかというと運営側なので、先生方や学生さんの外からかつ専門的な知見がある方々から見ていただいて、どこを伸ばしていくべきなのか、伸ばし

ていくためにはどのようなアプローチがあるのか、外に向けてのプロモーションの仕方、対象が県内、県外、国外で、どのような優先度合で進めていかなくてはいけないのか、これから動きながら考えていきますので、是非せと短さんの知見をいただきたいと思います。

【安村】

大学という教育機関ですから、学生も鍛えなければいけないですし、学生には観光振興の歴史、文化、産業もそうですが、本物を見せたいですね。

本物性（オーセンティシティ）を観光でも言いますが、真正性と難しいことを言いますが、やはり本物なんですよね。

本物なんてものがあるのかと言えば、それは文化や価値はどんどん変わっていくので何が本物かはわからないんですけど、やはり我々が心で感じられることが本物なんでしょう。それが東かがわ市にはいっぱいあると思います。先ほどのお話でもすごく感じる場所がありますので、それを素材に学生を鍛えたいと思います。

【内田】

若い世代の人が見た時に、何気ないものが観光資源になるということは十分にあります。

【安村】

学生は結構面白いことを言うこともあるんですよ。

【上村】

そうですね。「その視点はなかったな」というのは、我々もあります。

もちろん東京に行って、私自身もいい経験はできましたが、香川県に帰ってきて10年、東かがわ市市長になって7年になるので、良くも悪くも外が少し見えづらくなっています。見えづらくなっていることはどうしても否定ができない。

【安村】

おそらくそれは先ほど言いました視座だと思うのですが、あらためて郷里に感じられたところはたくさんあるのではないかなと思います。

【上村】

自分も今年45歳になるので20代の感覚というのが、言っていることの理解はできるんですよ。

「そういうのがいいんだ」「そういうのが面白いんだ」と理解はできても、共感できないんですよね。「これが面白いんだ、でもなんで面白いんだろう」という感覚になるので、そこはやはり20代は20代、30代は30代、もっと言うと10代でないとわからない感覚は絶対にあると思います。それを学生の皆さんの感覚で、「東かがわ市のここが面白いですよ」「ここに来たらいいですよ」という新しい視点をいただきたいと思います。それをどう育てていくか、それをど

うキャッシュポイントにして、観光産業として成り立たせていくかという専門的なご知見を先生方からもいただきたいと思います。

【安村】

及ばずながら是非一緒にやらせていただけるとありがたいです。

【上村】

是非、私たちもせと短の皆さんと一緒に、一緒にやってくれないと困りますので。

【内田】

どうもありがとうございました。それでは本日の非常に有意義な対談をこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

【上村】【安村】

ありがとうございました。

★★★★アフタートーク★★★★

———これからの未来を選択する若者に向けてのメッセージ———

【上村】

高校生や大学生の方と話を
して、「自分のやりたい
ことがなかなか見えま
せん」「自分が何に向い
ているのかが分かりませ
ん」という時に、私が話
すのは「まず、自分が嫌
なことを想像してくださ



い」と言います。人間というのは不思議なもので、「ポジティブに物事を考えな
さい」と言うとなかなかできないのですが、ネガティブに考えることは簡単なん
ですよ。「これは嫌だ、あれは嫌だ」というものは誰しもたくさんあると思いま
す。そこを突き詰めて裏返したところが、おそらく自分のやりたいことなんです
よ。

私の経験を振り返ると、自衛隊に入ったのも自分の親戚を助けられないことが
嫌だったんです。広告代理店（PR 会社）に入ったのも自分の好きなものを誰も
知ってくれないことが嫌だったんですよ。そのストレスが、結果、エネルギーに
なっていったというのはあるかもしれないですね。

大学でのコース選択だったり、大学を卒業して就職するタイミングで、自己分析
をしますが、「自分がやりたいことはこれだ」となかなか決めづらいことがあり

ます。でも、自分がやりたくないこと、嫌なことからアプローチしていくと「あ、私はこれが嫌なんだ」と、そのストレスの裏返しがおそらくやりたいこと、やりたい職業が見えてくるのではないかと思います。

実際、私が 38 歳で東かがわ市の市長になり、市長になる決意は 37 歳だったのですが、中学を卒業してから 20 年間香川県を離れていたんですよ。地元に戻ってきて、「あそこのお店はこんなお店になってんだ」「あのおっちゃん変わらんない」みたいに、私は楽しかったんですよ。帰ってきた時に、東かがわ市の大人たちが「東京でちゃんと働いてたのに、何で帰ってきた？」「うちの町には何もなくなっちゃったから」と言われることがすごく嫌だったんですよ。そういう大人がいる町に若い人が残ってくれるのか、来てくれるのか、戻って来てくれるのかといったら、答えは否じゃないですか。この環境、この空気感をどうにかしたいと。すごくストレスを感じて。だったら、自衛隊や広告代理店、国会議員秘書と、自分が経てきた経験を役立てられるのは政治家だな。その中でも市長だなというところに行きついたということです。

【安村】

しかし、その時、その時の逆境からの意思決定はすごいですが、よく次につながりますね。挫折をされたことないんですか？

【上村】

めっちゃめっちゃしてますよ。小学校時代、中学時代は自慢じゃないですけど、運動神経は結構良かったんです。足も結構速くて、小学校時代に 100m 走で香川県 3 位になって。自衛隊に入ると、そんなやつは五万といるんですよ。そういう世界に入ってますからね。力は敵わないし、足の速さも敵わないし、持久力も敵わない、そんな人たちがたくさんいて、私は決して優秀な自衛官ではなかったです。表彰もされたこともないです。

20 歳で自衛隊を退職し、21、22 歳で受験勉強をして大学に入ったのが 23 歳の時だったんですよ。現役で大学に入った人からすると、私は四つ上。それなりに社会経験もありましたが、「いや、一般企業ではなく自衛隊なんですよ」という感じでした。大学ではすごい人が本当にたくさんいるんですよ。「なんで 10 代でそこまでの経験してるの？」といった人や、それこそスポーツも勉強もそうですし、大学時代から起業しているような人もいました。ですので、決して優秀な大学生でもなかったんですね。

会社に入ったら「私は自衛隊をやめて、大学卒業して、就職してるんです」という感じですけど、当たり前ですが、仕事ができる人はたくさんいます。

地元に戻って来ても「中学を卒業してから自衛隊に入り、それから大学を卒業して、広告代理店の経験をして、さあ皆さんお待たせいたしました、上村一郎が帰ってきましたよ」みたいな感じで帰ってきたところで、やはり東かがわ市、

香川県内にもすごい方々がたくさんいたので、職業が変わる、環境が変わるごとに毎回打ちのめされています。そこで足りないものも見えますし、「こんなはずじゃなかった」は毎回感じています。

結局、「このチャレンジが駄目でも、なんとかなるだろう」というのはあります。自衛隊に入っても同時に通信制高校に通えましたし、仮に自衛隊をやめても高卒資格が取れるから大丈夫というのありました。大学受験も第一志望が駄目でも、どこかの大学には入れるだろうと思っていましたし、それこそ市長選挙に挑戦したのが37歳だったので、仮に落選してもまだ人生のやり直しが十分効く年齢だったので思いきれたというはあります。逆に50代、60代だったら市長選挙に挑戦してなかったと思いますね。落選のやり直しがきかないので。

大学生、短大生は19歳から22歳ぐらいだと思うので、その世代は必ず人生やり直すことができますから。私は大学に23歳で入学して、卒業は26歳。新入社員は27歳でしたから、それでもいろんなところでやり直しができているので。自分が思い立った時に、チャレンジできる環境が目の前にあれば、チャレンジした方がいいと思いますし、そこでダメでもやり直しができます。チャレンジする内容は自分が嫌なこと、辛いことを突き詰めた裏返しであれば、必ず自分が満足できるはずです。

———Uターンで帰って来たきっかけ———

【上村】

東京でずっと働いていましたが、長く暮らすところではないと感じていたんです。元々どこかのタイミングで香川県に帰ろう、東かがわ市に帰ろうというのはなんとなく思っていたのですが、ひょんなきっかけで東京香川県人会という東京在住で香川県にゆかりのある人たちが集まる会があり、その会に参加した際に後々秘書として師事する国会議員の先生も来られていて、その方と色々話している中で地元（香川県出身）の秘書が欲しい、その方が中讃、西讃のご出身の方なので香川県の東の方で働ける、その方は自衛隊が結構好きである、その方は真面目な方なので自分自身の宣伝がちょっと苦手。「それなら上村じゃないですか」そこからお声がけいただいて、私もどこかのタイミングで香川県に帰ろうと思っていまして、「じゃあ秘書として香川県で働かないか」というお話をいただきました。私自身も両親が公務員で、祖父も満州鉄道で比較的、公に近い仕事をしていましたから。自分も自衛隊にいましたので、政治、行政に関する仕事に対して心理的なハードルもなかったもので、秘書のお声がけに「じゃあついていきます」というきっかけで帰って来ました。

——上村市長が東かがわ市に戻ってきたとき、「東かがわ市には何もない」と言っていた大人の方々や町の雰囲気は変わってきている？——

【上村】

変わってきていると信じています。

「うちの町には何もない」は高松市の人も言うんですよ。でも、私からしたら高松市はサンポートから塩江町まで全てあるじゃないですか。JR の駅も空港施設もあるし、お店はたくさんあるし、住宅街もあるし、遊ぶところはたくさんあるし。

大学時代に実家が丸ノ内という後輩がいて、その後輩も「丸ノ内といっても別に何もないですよ」と言うんですよ。「東京の丸ノ内に何もないと言ったら日本はもう何もないぞ」というレベルなのですが、これは物理的なものではないと感じていて、結果、その町が好きかどうかなんじゃないかと。自分の住んでいる町が好きではないから「何もない」という視点になるんだと思います。いかにして地元の東かがわ市、香川県を好きになってもらえるかは結構考えますね。

現段階での仮説が他者評価ではないかと感じます。それこそ自分では観光資源が何もないと思っている場所に、市外、県外、国外から人が来る。メディアでいうと、自分としては何もないと思っている場所が、新聞やテレビに載る、ネットでバズっているという、他者からの評価がある。おそらく、東かがわ市民が東かがわ市民に対して「もっと自信を持ちましょうよ」と言っても、自信を持てるわけがない。日本人が日本人に対して「もっと愛国心を」と言われても、育つわけがないじゃないですか。だから、テレビ等で海外の方に日本のここがすごいと語っていただくことで、私たちの自信になるということがあるので、情報発信に力が入れたり、市外の方から認めてもらえることで、自信を持てるのではないかと考えます。

【安村】

おっしゃる通りで、観光まちづくりの上手くいっているところは、必ず地域の住民と訪問者が交流する場があるんですね。「うちの町のどんなところが良かったですか？どんなところが悪かったですか？」という意見を交流の中で聞いて、良いところをもっと良くしていく。客体視という言葉があり「他人の目を見て、自分の町を知る」という、まさに上村市長がおっしゃったことではないかと思うんです。自分の町を他者の目で見るという仕組みを作って、訪問者と交流ができる場所があってもいいと思いますね。



 **せとうち観光専門職短期大学**
SETOUCHI